

角田柳作の年譜の空白を埋める

その渡米以前の旺盛な著述活動

島内景二

1 これまでの研究と、新たな発見

1・1 問題意識

現在、日本文化研究の国際化の必要性が声高に唱えられているが、明治・大正・昭和初期に日本文化の国際化に努めた先覚者たちの努力が、正に理解されていないのではないかと危惧する。このことに、わたしは大きな危機感と不満を感じている。彼らは、外国人であれば来日して文化摩擦に苦しんだし、日本人であれば海外に渡って日本文化の紹介に努力した。文字通りの「手探り」で、しかも「血みどろ」の奮闘をした人々である。彼らの奮闘を正に評価することなしに、そしてそれを理解して踏まえることなしに、日本文化を世界に向けて発信することは不可能であるし、また不毛であると考えらる。

わたしは、角田柳作（つのだ・りゅうさく、一八七七―一九六四）という一人の明治人に焦点を当てて、彼がいかなる「初心」と「素志」を胸に抱いて海外において日本学を樹立しようとしたか、その悲願を発掘しようと思いつけている。アメリカのコーンピア大学で永く日本学の講師を務め、ドナルド・キーンを始めとする幾多の俊秀を指導した名教師として、「米国における日本学の父」と称えられる角田柳作。けれども、その渡米以前の経歴は、ごくわずしか知られておらず、空白に包まれていた。

ドナルド・キーンと言えば、昭和三十年代の戦後日本文学の黄金期に立ち会い、三島由紀夫・吉田健一・安部公房・大江健三郎たちと親交を結び、彼らに多大な文学的影響を与える一方で、彼らの優れた作品を美しい英語に翻訳し、欧米の読書人に提供した人物である。まさに、戦後日本文壇の最大の恩人の一人である。彼の三島たちへの友情と力添えによって、日本人作家がノーベル文学賞候補に挙がることも現実のこととなった。そのような恩人ドナルド・キーンの恩師が、角田柳作である。だから、角田柳作の日本学の根底にあるものを発掘すれば、ドナ

ルド・キーンの研究の初心も明らかとなり、戦後日本文壇が高揚と隆盛を迎えることができた根本要因も明らかになる。三島由紀夫研究、吉田健一研究、大江健三郎研究にも、新たな視点が提供されることだろう。

1・2 これまでの研究

わたしの角田柳作追跡は、平成十四年の大晦日から始まった。そして、中間報告書を、『電気通信大学紀要』第16巻2号（平成十六年一月）誌上に、「緑亭生・緑亭主人は、角田柳作か 明治二十九年から三十年までの民友社の彗星」として発表した。

この論文（以下「前稿」と呼ぶことにする）は、以下に掲げる著作群を角田柳作の手になるものと新たに認定することで、角田柳作研究の実質的な始まりを告げるものであった。従来は、本名で発表されたのみを、角田柳作の著作として紹介するレベルに留まっていた。

緑亭主人『紫式部』（明治二十九年十一月五日・民友社）

緑亭主人『清少納言』（明治二十九年十二月二十二日・民友社）

中龍児『詩人西行』（明治二十九年十二月二十三日・民友社）

緑亭主人『雲井龍雄』（明治三十年一月十九日・民友社）

緑亭生『兼好法師』（明治三十年四月二十二日・民友社）

角田柳作『井原西鶴』（明治三十年五月二十一日・民友社）

著者不明『日本文学梗概』（明治三十年七月二十三日・民友社）

この七冊を角田柳作の執筆と推定した根拠は、文体論的考察と、思想的な共通点の発見であった。文体的には、美文あるいは美文とも言つべき格調の高い文語文であり、四字熟語を多用する漢語を特徴とするが、英語（カタカナ表記）も交

えるなどの工夫がなされている。七冊には共通する語彙が膨大であり、すべて同一人物の文体と考えるのが自然であった。だから、角田柳作の著書であれば他の六冊も角田柳作の著作と考えねば説明できぬほど、語彙の重なりは多い。

思想的には、海外の文学も視野に収めつつ、「日本の古代精神」を高く評価する点に、最大の特徴が認められた。そして、平安・鎌倉・室町・江戸のそれぞれの時代の文学者たちは、その「古代精神」との関わり方において評価されるのである。自分の生きている時代に逆行してまで古代精神を復活させようとした文学者は偉大であり、古代精神を顧みずに時代に埋没した文学者は二流だという批評軸である。この批評軸は、七冊すべてに一貫しており、まったくぶれていない。

以上の分析により、東京専門学校卒業直後の角田柳作は、民友社で働きつつも複数の筆名を使って旺盛な執筆活動を展開していたことが判明した。もしかしたら、金銭を得たいという経済的理由のために、短期間に膨大な文章を書き流していたのかもしれない。そして、世間も筆名で書かれた書物群であるがゆえに、正当な評価を下してこなかったのかもしれない。

しかし、この七冊の行間に流れている批評精神は、熾烈である。そして、純度も高い。これだけの才能が、現代日本でほとんど顧みられないのは、残念を通り越して、不当な冷遇だと断じざるを得ない。近代文学史の事典や研究書には、優れた文明批評家・美文家として「角田柳作」の項目を新たに設定すべきであり、その業績が教育者としての「角田柳作」を生んだことを明記すべきではないか。コロナビア大学での日本学の確立が、角田柳作でなければ達成できなかった根本理由は、彼の日本滞在時代の著作活動から説明できよう。いや、説明しなければならぬ。

なお、ここで前稿の修正を一つ行っておきたい。前稿では、民友社の著作物に見える「俳諧堂主人」という筆名も、あるいは角田柳作の筆名だった可能性があると述べておいた。けれども、その後の調査で、「俳諧堂主人」は正岡子規の門下の一人で、当時の民友社に在籍しており、上原三川（一八六六～一九〇七）と共に子規派の俳句アンソロジー『新俳句』（明治三十一年刊）を編集した奇才・直野碧玲瓏（一八七五～一九〇五）ではなかったか、とも考えるようになった。まだ流動的で断定はできないが、明治十年生まれの角田柳作と言い、明治八年生まれの直野碧玲瓏と言い、民友社には少壮気鋭の若者たちがいた。彼らは民友社の看板を担う以前に退社して去っていったが、民友社では実にすばらしい仕事を成し遂げている。

1・3 新たな研究の展開

平成十八年四月、わたしの研究は新しいステップに入った。インターネット上の国会図書館のホームページでは、「近代デジタルライブラリー」が公開されており、研究者に大いに役立っている。そこで公開されている明治期の書物群の数が、この四月から一気に十二万七千冊へと大幅に増加したのだ。

この十二万七千冊の書物の大海の中に、日夜わたしは潜り込み、明治三十年七月二十三日刊行の『日本文学梗概』（民友社）を最後に消えていった彗星・角田柳作のその後の行方を再発見しようとした。

というのは、前稿では『日本文学梗概』を最後に、角田柳作は執筆者から教育者へと転じたと推測し、ここで角田は筆を折ったと書いた。けれども、そう書いた直後から、わたしの心の中で、「そうではないのではないか」という疑問が頭を擡げてきたのである。これほど短期間に、あれほど情熱的な文章を書き続けた角田柳作である。その「執筆癖」が、そう簡単になくなるはずはないのではないかと思われたからである。

青春の情熱はそう簡単に消滅するものではないし、また経済的な問題も中学教師になつたからといって全面的に解決するわけではない。

角田柳作は、民友社を退社した後、明治三十二年八月から、弘法大師が開設した綜藝種智院の流れを汲む京都の真言宗の学校（真言宗京都高等学校）の教師となつた（明治三十五年八月まで）。明治三十六年四月からは福島中学教師となり、仙台一中でも短期間（明治四十一年十月～四十二年四月）教壇に立った。そして、明治四十二年五月にハワイに渡り、本願寺系の中学の校長を務めた。彼がアメリカ大陸に渡りコロナビア大学で学ぶようになったのは、大正六年のことである。

明治三十年から四十二年までの十数年間の角田柳作の年譜は、職歴の欄はほぼ埋まっている。けれども、その著述歴は、本名で出版された二冊の翻訳書しか知られていない。

キッド『社会の進化』、明治三十二年二月十三日発行、開拓社（東京市京橋区）

ヴント『ヴント倫理学史』、明治三十七年八月十日発行、金港堂書籍株式会社（東京市日本橋区）

これ以外に、たとえ一冊でも、角田の特徴ある文体と特徴ある思想を、「近代デジタルライブラリー」の十二万七千冊の中から発見できないものだろうか。そう願って検索し続けた報告書が、本稿なのである。

1・4 一連の著作群の探知

やはり、角田柳作は、前稿で掲げた七冊のみで筆を折ったのではなかった。そのように強く思わせる著作群が、十冊近く見つかった。すべて、筆名である。だから、角田柳作の著作であるという直接的な（決定的な）証拠は、何も無い。文体と語彙と思想の一致による推定に過ぎない。

けれども、角田柳作の執筆活動が、民友社を去ってから依然として旺盛であり続けたという推測は、おそらく真実に近いのではないかと思われる。現在の時点で、以下に掲げる書物の中の少なくとも数冊は、あるいは「角田柳作」の筆名による著述ではないかと、わたしは強く推測するにいたった。

まず、その一覧表を提示しよう。

育英社（舟霧・松霞）『晴川春草・歴々萋々』（文港堂、明治三十三年二月）

舟霧・松霞『飛花落葉』（育英社、明治三十三年三月）

松霞子『血と涙』（河合文港堂、明治三十三年八月）

浪の奴島『恋の本相』（河合文港堂、明治三十三年八月） 兼好論を含む。

松霞子『青年文学時文断片』（武田交盛館、明治三十三年九月）

無腸公子『花紅柳緑誌』（河合文港堂、明治三十三年十一月）

残菊『せり籠』（河合文港堂、明治三十四年六月）

松霞子『血と涙』（小谷書店、明治三十六年四月） の再版

無禅・青岑『思想と人物』（小谷書店、明治三十六年四月）

壺天禅洞『徒然草と兼好』（弘文社、明治三十六年七月）

破魔禅『禅と活動』（東亜堂書房、明治四十年十二月） 「だ・である」

調。「台北蝸牛庵」にて執筆とある。

破魔禅『偉人修養史』（東亜堂書房、明治四十一年七月） 兼好論を含む。

この一覧表からは、角田が「文学・文芸」から「社会思想」へと批評の力点を移しつつあることも、見て取れる。角田は真言宗京都高等学校で英語と倫理学

を教えた。だから、当然といえば当然のことではある。何らかの決定的な証拠が出現して、これらの中の数冊でも角田柳作の著作と認定されるとき、日本の近代文学史は大きく書き換えられるであろう。

すべて筆名で書かれたゆえか、学界でまともに相手にされることの少なかった角田柳作の書物であるが、は沼波瓊音の『徒然草講話』でも言及されている（むろん、沼波の文章には角田柳作という名前は出てこない）。

本稿は、わたしが新たに発掘した角田柳作の著作群を紹介し、その思想の発展を辿ることを目的とする。それが、彼がコロンビア大学で樹立した「日本学」の基底にあると信ずるからである。

2 兼好論の深まり

2・1 『恋の本相』

やみくもに十二万七千冊の中へ飛び込んで、角田柳作とぶつかる確率はきわめて低い。そこでキーワードをいくつか設定して絞り込むことにしたが、まず「兼好」で検索を試みることにした。

前稿で角田柳作の著作とほぼ断定した紫式部・清少納言・西行・西鶴・雲井龍雄のいずれでもよかつたのだが、まず「兼好」を試みたのは、緑亭生という筆名で書かれた『兼好法師』が最も学術的であり、著者の力の籠もった著述であったからである。角田柳作の「兼好」への思いは、必ずや間欠泉の如く何度も噴出するに違いないと思われた。

その結果、「浪の奴島」という著者名の『恋の本相』が見つかった。著者名を、国会図書館のホームページは「ナミノヌシマ」と読んでいる。確かに、そう読むのだと思われる。この不思議な筆名の由来と意味は正確にはわからないが、『万葉集』巻三の二四九・二五〇の柿本人麻呂の旅の歌を踏まえているのだろうか。なお、二四九は、古来、屈指の難訓歌として知られている。

三津の崎浪をかしこみ隠り江の「舟公宣奴嶋ル」

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近づきぬ

それにしても、不自然な筆名である。「隠り江」とあるから、本名を隠しているという洒落であろうか。『恋の本相』以外に、この筆名での著作物が見つからなかったのも、当然だろう。

序言に、「京都嵯峨の蝸庵に於て、本書を執筆したとある。発行所は、京都寺町下ルの「河合文港堂」、著者は「京都寺町通二条下ル妙満寺前町十三番地」の「育英社」で、その代表者は「河合卯之助」と、奥付にはある。

河合卯之助は「浪の奴鳥」の本名ではなくて、育英社の代表にして河合文港堂の代表である人物だろう。もしも、『恋の本相』が角田柳作の著述であるのなら、この「育英社」も新たなキーワードとして大いに有効なものとなる。育英社の刊行物を、順に閲覧してゆけばよいからだ。

角田柳作は明治三十二年八月に京都に赴任したので、明治三十三年八月二十五日発行の『恋の本相』の出版社が京都にあることは、自然である。むろん、その数年前から、高野山で学問するなど、関西に移住していたのであるが。

読み始めてみると、「自然の講座」の章に、「平安の自然の花紅柳緑が如何に艶麗なる思想を詩人に教授せしか、桜の如き源氏物語、梅の如き枕草紙を初めとし、家集に勅撰に濺がれし千行の涙と万解（「斛」の誤植か）の血は、悉く是れ自然の紅玉水晶の溶解に外ならず」という美文がある。

「花紅柳緑」は、「角田柳作」緑亭生」の愛用語であったし、京都の美しい自然が『源氏物語』や『枕草子』を生んだとあるのは、角田柳作の『紫式部』と『清少納言』にも書いてあった内容と一致する。「平安の天地の両美人」の章でも、紫式部と清少納言のことが論じられている。

「病床の弱音」の章では、著者がかつて「脚氣」を患って弱気になったことが語られる。もしも角田柳作に「脚氣」の持病ないし病歴があったことが判明すれば、「浪の奴鳥＝角田柳作」という私見は証明できる。

『恋の本相』では、歴史上の有名な辞世が紹介されたりした後で、最後に、「失恋的厭世家として僧兼好」という長文の評論が掲載されている。「付録」のような扱いである。そして、このような本作り（本論 + 付録）は、民友社刊行の七冊で、角田柳作が何度も採用していたスタイルであった。

この「失恋的厭世家として僧兼好」には、「錦心繡腸」「朝有紅顏跨（「誇」の誤植か）世路、夕成白骨朽郊原」などの、民友社時代の角田柳作の愛用語がちりばめられている。「浪の奴鳥＝角田柳作」は、文体的にはほぼ確実に成立する内容も、その後の国文学研究で顧みられなくなった兼好伝説に依拠しており、兼好伝説を取り込んで書かれた「兼好法師」と基本的スタンスは同一である。

浪の奴鳥、すなわち角田柳作は、ここで兼好は失恋をしたからこそ真実の自分を発見し、南朝の忠臣となったのみならず、日本の誇るべき哲人となりえたのだ

と述べ、『恋の本相』という書物のテーマに最もふさわしい人物としての兼好を称揚している。

思い返せば、『兼好法師』でも、「彼は恋情に失敗して、絶望の人とはなりたり」と書き記していた。『兼好法師』の三年後の著作である『恋の本相』には、まだ『兼好法師』の叙述からの目立った深化はないが、それと同一の視点から凝縮的に兼好の人生を論じている。読者が一気に読める、大変にわかりやすい叙述となっている。そこに、表現者としての角田柳作の成熟を見ることもできよう。

2・2 『徒然草と兼好』

この書は、「壺天禪洞」という筆名で書かれている。明治三十六年七月二十八日の発行。発行所は、「東京市下谷区仲根岸町五十四番地」の「弘文社」。明治三十六年四月から、角田柳作は福島中学の教師となった。前年の八月に京都を退職しているから、福島へ着任する直前の半年間は、おそらく東京で活動していたのだろう。だから、版元の出版社を関西から東京に移しても不思議ではない。

『徒然草と兼好』を一読すると、「百尺竿頭を一步進める」とか「翱翔」などの角田柳作の愛用語彙、さらには『源氏物語』は桜で、『枕草子』は梅だという角田の愛好する比喩（出典は松平定信の言葉）が見える。やはり、「壺天禪洞」は角田柳作であると推測される。文体は、例によって文語文だが、これまで読み慣れてきた「角田柳作の文体」とは少し違っているようにも思われる。格調高く歌い上げてはいるのだが、何かずっしりと胸に伝わるものがある。時間に追われて書くのではなく、書きたいことを書くのだという内実が伴っている。もしかしたら、そこが「壺天禪洞」と角田柳作が別人だという論拠になりかねないが、重なる文体的側面の方が多い。

『兼好法師』や『恋の本相』の著者とは別人かとも思わせるほどに、『徒然草と兼好』には、角田柳作の旧著よりも重い主張がある。角田柳作の『徒然草』に寄せる思いのすべてが、『徒然草と兼好』には込められている。『徒然草』の中から全部で四十八段（著者本人は四十七段と言つが四十八段である）を抜粋して本文を掲げ、簡単なコメントを述べる第五章がある。この部分は、例によって本論に対する「付録」の扱いなのだが、内容が充実しており本格的である。この部分に、「著者ひそかに期するところあり」と、「凡例」で自信のほどを示している。

Donald・キーンの回想によれば、コロンビア大学で『徒然草』を講義した角田柳作は、いかにも読み慣れた調子で原文を音読して、聴講している学生たちを

感動させたという。その自信は、『徒然草と兼好』の執筆によつて培われたのではなかったか。

壺天禅洞が角田柳作の筆名である根拠を、さらに述べよう。それは、『徒然草と兼好』冒頭の「自序」の部分で、評伝とは何かという本質論を展開している点に発見できる。「人の伝記を評述するとは、人の生命をとることなり」と、いきなり激しい主張が書かれている。則ち、真の評伝とは、ある人物の長所・美点ばかりを称賛するのではなく、その短所・欠点を厳しく指摘せねばならない、というのだ。この論拠は、「緑亭主人」名義で書いた『清少納言』で、「マコレー卿」の説を引用しながら、評伝作者に相手への尊崇の念が強すぎれば単に褒めただけで終わってしまう、そうでなくて、人物の欠点を痘痕まで描かねばならぬ、と述べている姿勢と同じものである。そして、角田柳作が本名で著した『井原西鶴』の「自序」で、自分が西鶴の欠点と過失を挙げつらつたのは西鶴を辱めんとする意図に発したのではなく、真実の西鶴の評伝を書くためであると述べ、本論で西鶴の精神的墮落を痛罵する姿勢と、全く同一のものである。

『徒然草と兼好』の自序では、「吉田松蔭」の評伝に関して、徳富蘇峰の名前が出る。これは、角田柳作が蘇峰の主宰する民友社に在職して薫陶を受けたことの反映だと思われる。そして、それに引き続いて、幸田露伴の言葉を引用しているのが重要だと思われる。露伴は、他人を評価した人間は、その内実がつまりならなければ本人の精神世界の貧しさを証明するだけのことであり、評伝作者は当人の「学殖の深淺厚薄、見識抱負の大小高低を世人に暴露する」のである、と述べたというのだ。この露伴の言葉は、おそらく角田にかつて、その通りに話した事実があつたのではないか。露伴が折角、角田柳作の著作『井原西鶴』のために序文を寄せて、出版への餞をしたにも拘わらず、角田が西鶴を痛罵した書を公刊したので、角田に向かつて、「こういう内容だと、書いた著者である君の見識が疑われるだけだ」と、直接あるいは間接に叱責した過去があつたのだろう。それを踏まえて、『壺天禅洞』は露伴の言葉を再録したのである。

露伴の言葉を引用したにも拘わらず、壺天禅洞、すなわち角田柳作は、「然りとはいへども、我れは是れを以て己（己）の誤植か）むべきにあらず」と態勢を立て直し、自分の信じる苛烈な評伝の方法を最後まで貫こうとするのである。

「自序」において、自分がかつて蘇峰に励まされ、露伴に批判されたと暗示していることは、壺天禅洞が角田柳作であることを、強く想定させずにはおかないのである。

さて、『徒然草と兼好』では、本格的な評伝と鑑賞を志すだけあつて、角田柳作は『徒然草』について腰を落としてじっくりと参考文献を読み直したのだろう。『兼好法師』では三男としていた兼好の出自を、『徒然草と兼好』では四男としていた。また、『兼好法師』では使わなかった『寢覚記』という書物を使つたりしている。

だから、本書は角田柳作の『徒然草』についての総決算であり、集大成だと言える。本書執筆の参考となつた書物の一覧の中に、『兼好法師』で批判した早稲田（＝東京専門学校）の先輩・水谷不倒の論文「徒然草と俗文学」、そして他ならぬ自分自身の著書である『兼好法師』の二つを掲げているのが、興味深い。

さて、本書は角田柳作の自信作だけあつて、『徒然草』に興味を持つ研究者や評論家の目にかなり広く触れたのではなかったか。沼波瓊音の『徒然草講話』には、巻末部分に「兼好法師」という評伝が掲載されている。これが、基本的に壺天禅洞の『徒然草と兼好』をベースとして、沼波の見解を付加したような書き方になっている。沼波の『徒然草講話』は近代を代表する『徒然草』の注釈書である。そこに、これだけの影響を与えているのだ。『徒然草講話』には、次のような一節がある。

（『徒然草』を）評した人はいろいろあるが、明治に於て、壺天禅洞の「徒然草と兼好」と云小冊子の末段ほど熱烈痛切なるものは他にあるまいと信ずる。この書の考証などに就ては賛同の出来ぬことが多いが、私はこの著者の兼好に対する態度の嬉しさに、次に末段の節々を抜いて挙げておく。

このあとで、ほぼ二ページにわたつて、壺天禅洞の文章を長々と引用している。沼波瓊音は、角田柳作の実証的な学問研究の手続きについては疑問を呈しながらも、彼の兼好に寄せる熱き志をよしとしているのだ。すなわち、文学にかける情熱の高さを評価されているのである。日本では、その文業の意義が正当に評価されることのなかつた角田柳作であるが、『壺天禅洞』という筆名でここまで沼波から評価されたことは、以て瞑すべきであろう。

しかし、沼波瓊音に続いて、『壺天禅洞』角田柳作を評価する国文学者は、とうとう出現しなかつた。今日、角田柳作の『兼好法師』も、壺天禅洞の『徒然草と兼好』も、わずかに『徒然草研究書目一覽』の片隅に残るのみである。そしてそれは研究史展望に目立たないように記載されているのみであり、実際にそれらの書物が読者に読まれる機会はほとんど失われている。

角田柳作（＝壺天禅洞）の説は、忘れ去られた。やはり、日本の学界では、角

田の見解は受け入れられない宿命にあるようだ。そこに、海外に転出した角田の哀しみが感じられてならない。愛弟子のドナルド・キーン日本の古典文化に寄せる卓説が、広く日本人に受け入れられ、戦後の日本文学を大きく展開させたことを知ったなら、現代日本を知るために古典の世界の探究に分け入った泉下の角田の霊は、どんなに喜ぶことだろう。

角田は、情熱的でありすぎた。そして、問題意識が大きすぎた。日本の古代から現代までの巨大な歴史の変遷を、神道や仏教との関わりを視野に入れつつ論じずにはいられない角田の文明観は、個々の作品の一つ一つの表現の解釈に拘泥する日本的な古典研究の世界では認められなかったのだろう。

2・3 『偉人修養史』

「兼好」というキーワードで発見した「近代デジタルライブラリー」の三冊目が、この書である。著者の「破魔禪」という名前は、実に奇妙である。だが、先に見た「壺天禪洞」という筆名と共通点があるように思われる。それでは、破魔禪という筆名の著者の書いた『偉人修養史』を紹介しよう。

明治四十一年七月九日発行、東京市本郷区の東亜堂書房。東亜堂は、沼波瓊音の『徒然草講話』の初版を発売している出版社でもあった。

本書『偉人修養史』は、日本史の中から三十人を選んで、その修養の具体的方法を論じたものである。その中に、『徒然草と兼好』の序文で特に名前の挙がっている八人の僧のうち、四人が入っている。

僧西行の『飘逸』

日蓮大士の『豪邁』

吉田兼好の『超脱』

南光坊天海の『闊達』

しかも、『徒然草と兼好』の自序で名前の出た「吉田松陰」（『徒然草と兼好』では「松陰」、『偉人修養史』では「松陰」）も、登場している。

しかし、『徒然草と兼好』では「四男」としていた兼好を、『偉人修養史』では「三男」としており、いささか気になる。あるいは、「破魔禪」は、角田柳作の筆名ではない可能性がある。

もつとも、兼好について述べるところは、『兼好法師』『徒然草と兼好』と重なるものである。それで、「破魔禪」という人物名で検索して、もう一冊を読んでみることにした。

3 「破魔禪」という筆名のもう一冊

これまでの研究で、「浪の奴島」と「壺天禪洞」の二つが角田柳作の筆名ではないか、ということはおぼろ確認できた。「破魔禪」という筆名については、疑問が残った。国会図書館の「近代デジタルライブラリー」には、「破魔禪」の著作がもう一冊発見できる。それが、『禪と活動』である。

明治四十年十二月二十一日刊行。東京市本郷区の東亜堂書房と、東京市京橋区の東亜堂書院という、似た名前の二つの出版社の共同出版である。表紙では、著者名の「魔」は略字（いわゆる「麻垂」のみ）である。しかし、奥付では「破魔禪」と正式に印刷されている。時折、Webcatで「破摩禪」という著者名を見かけることがあるが、「破魔禪」で間違いはない。

ここで、驚くことが二つある。一つは、文体が他の角田柳作の著作群の歌い上げるような文語文ではなくて、口語文であるということ。もう一つは、国会図書館の「近代デジタルライブラリー」によれば、同図書館の整理上の書き込みとして、

堀内文二郎（破魔禪）／著

と記入してあることである。堀内（堀内ではなく堀内）文二郎という人物については明らかにしないが、「堀内文二郎」「破魔禪」であれば、角田柳作説が崩れ、同じ筆名の「破魔禪」の手になる『偉人修養史』も、角田柳作の著作ではないことになる。

冒頭には、夏目漱石も参禅したことで知られる禅僧・釈宗演たちの序文が載っている。そして、著者の序文には、「明治丁未臘月」「台北蝸牛庵に於て」「破魔禪誌す」と書いてある。

すなわち、本書は明治四十年十二月に、台北で書かれたものである。「破魔禪」角田柳作」とする説に立つならば、「蝸牛庵」については、『恋の本相』が「京都嵯峨の蝸牛庵に於て」執筆されたと明示してあったことが思い合われる。こちらは「蝸牛庵」だが、角田柳作は自分の住まいを「蝸牛庵」とか「蝸牛庵」などと称する癖があったのではないか。

しかし、明治四十年と言えば、角田柳作は福島中学で教壇に立っているはずである（福島中学を離任したのは明治四十一年八月）。「台北」とは、どうしても結

びつかない。だから、「破魔禪は角田柳作と別人である」とするのが、妥当である。

けれども、気になることがある。柳井久雄『角田柳作』（平成六年・上毛新聞社）には、京都時代の角田柳作の生活について、「しかし、学問にばかり夢中生活は苦しかったようです。そんなとき、柳作は台湾への移民を考えていたということですよ」という聞き書きが記されている。これは、柳井が角田柳作の親族から直接に取材した内容である。角田柳作には、台湾への思い入れがあった。だから、筆名で書いた書物に、現住地と異なる地名を書くことが絶無とは言えない。

結論を言えば、『禪と活動』は、「台北」という地名があるゆえに、そして国会図書館が「堀内文二郎」という実名を示唆しているゆえに、「破魔禪＝角田柳作」説には不利な要素が圧倒的に多い。今後の課題としたい。

4 「育英社」と「河合文港堂」を手がかりとして

4・1 新たな展開

角田柳作の著作と推定された『恋の本相』は、「育英社」を著者代表とし、「河合文港堂」から出版されていた。それで、この二つをキーワードとして近代デジタルライブラリーを絞り込み、実際に書物を通読して「文体」から角田柳作と思われるものを残していった。その結果、次の五冊の文体的特質が、角田柳作の著述と似ているものとして浮上してきた。

- ・育英社（舟霧・松霞）『晴川春草・歴々妻々』（文港堂、明治三十三年二月）
- ・舟霧・松霞『飛花落葉』（育英社、明治三十三年三月）
- ・松霞子『血と涙』（河合文港堂、明治三十三年八月）
- ・無腸公子『花紅柳緑誌』（河合文港堂、明治三十三年十一月）
- ・残菊『せり籠』（河合文港堂、明治三十四年六月）

さらに、「松霞」をキーワードとして検索すれば、次の書が発見された。

- ・松霞子『青年文学時文断片』（武田交盛館、明治三十三年九月）

そして、松霞子の『血と涙』には、復刊本が発見された。

- ・松霞子『血と涙』（小谷書店、明治三十六年四月）

それで、この書物の版元である「小谷書店」をキーワードとして調べてみると、次の書物にも角田柳作の文体と共通する側面が発見できた。

- ・無禪・青岑『思想と人物』（小谷書店、明治三十六年四月）

これらは、明治三十三年から明治三十六年までの期間に、集中的に出版されている。すなわち、角田柳作が京都から福島中学に転出したのが明治三十六年四月であるから、すべて彼の京都時代に書かれた著書と考えれば矛盾はないことになる。

まず、「松霞」という筆名を含む著作群から、それらが本当に角田柳作の著作であるかどうかを確認してゆくことにしよう。

4・2 『晴川春草・歴々妻々』

明治三十三年二月八日の発行。著者は「育英社」で、その代表者は「河合卯之助」。発行者は「文港堂・河合卯之助」。すなわち、「河合文港堂」である。印刷所は、「京都市下京区油小路通松原上ル麓町拾壹番地」の「仏教図書出版株式会社」。育英社が仏教の理念の普及を目指しており、角田柳作が真言宗京都高等学校に勤務していたことと符合するものである。

タイトルは、「晴川春草」の四字が小さく二行に分けて印刷しており、「歴々妻々」は大きく一行で印刷してある。すなわち、「晴川歴々、春草妻々」という意味であろう。

内容は、全部で二十五編のエッセイ・小文からなる。目次によれば、うち六編が「舟霧」という筆名、十九編が「松霞」という筆名である。「舟霧」は、柿本人麻呂の名歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に鳥隠れゆく舟をしぞ思ふ」に依るのであるうか。「松霞」という筆名は、どの一首に由来していると特定できないけれども、『万葉集』以来、しばしば取り合わされてきた「松」と「霞」の観念連合（縁語）に依るのである。

『晴川春草・歴々妻々』を読むと、「舟霧」も「松霞」も、どちらも角田柳作

の文体であると思われる。「啣々たる虫声」「宇宙の大観」「百尺竿灯」などの角田柳作の愛用語彙がちりばめられている。

ただし、「舟霧」松霞「角田柳作」という立場に立つならば、文中にしばしば出る著者の実人生ならびに経歴については、多分に創作的な部分が生じつつあると考えるしかない。「盆の月」では、久しぶりに郷里に帰省して母と一緒に、姉と祖父の墓参をしたというエピソードが語られ、「故郷の幽泉」では十二歳の時に二歳年上の美少女に初恋を抱いたが、彼女はまもなく肺炎で死んでしまったというエピソードが綴られている。筆名で書かれる文章にどこまで著者の実人生がそのままに書かれているか疑問であるが、一応ここで紹介しておく。ちなみに角田柳作は、父が早くに亡くなったので、祖父と母に育てられた。そして、姉がいた。

ただし、「舟霧」松霞「角田柳作」説に大変に不利な記述がある。それは、舟霧名義で書かれた「片道三里」。ここでは、「荒岩」という四股名の大相撲の力士が自分と「同郷」なので関心がある、と書かれている。明治三十三年当時の人気力士「荒岩」は鳥取県(因幡)の出身である。「片道三里」には、「孤筈」という角田柳作の愛用語彙があるので、「舟霧」角田柳作と認定したのであるが、この「荒岩と同郷」であるという記述をどう解釈するか、大いに悩んでいるところである。

角田柳作が真言宗京都高等学校に在職していた時期に、角田と東京専門学校で同級生であった丹生實栄や一学年下だった清瀧知隆らが、同僚として、あるいは宗門内で親しい関係にあった。彼ら角田柳作をめぐるグループが、「舟霧」「松霞」などの筆名を名乗ったのかも推測可能である。

興味深いのは、終わり近くに置かれた「歌留多の喧嘩」。これも「舟霧」名義だが、ある「青年作家」=「一文学者」の告白を口語文で紹介している。彼は、隣家の幼なじみの少女と結婚した。というのは、彼には三つの野望があり、「相当の職業」「得意の妻」「不朽の名誉」の獲得であった。彼はまず「得意の妻」から実現したが、いかんせん「相当の職業」に就く以前だったので、恋愛結婚して結ばれた妻も、愛の結晶として生まれてきた子どもも貧しさにあえぎ、自分は「幸福な家族」は無理だと悟った。野望には、それを実現すべき順番があったのだ、社会的地位を得る前の早すぎる結婚はよくない、というオチである。

角田柳作は、京都にいた頃、やす夫人と結婚した。彼女の実家は、角田柳作の実家のすぐ近くで、道を隔てた東の家だったという。「歌留多の喧嘩」では「壁

隣」と書いてあるが、これはほぼ事実である。もし「舟霧」が角田柳作本人でなかったとしても、角田柳作の親友であったとしたら、ここには角田柳作の京都時代の文学者としての焦りが書き留められていることになる。その「舟霧」も、角田柳作の影響でほぼ同類の文体と語彙をもっている。「舟霧」角田柳作」としたら、舟霧本人が鳥取を故郷だと述べている点をどう説明するかが、大きな宿題として残る。

この疑問さえ解決できれば、「舟霧」も「松霞」も、どちらも角田柳作の筆名だと考えることが可能である。

4・3 『飛花落葉』

明治三十三年三月二十五日発行。著者は、育英社。その代表者は、河合卯之助。発行者は、「文港堂・河合卯之助」。正確な書名は『散文韻文・飛花落葉』である。韻文、すなわち新体詩が含まれている。浪漫的な色調の詩である。

全部で三十四編から構成されており、執筆者は舟霧が十七編、松霞が十七編と半分ずつの割り振りとなっている。通読してみると、舟霧と松霞は同一の文体であり、個性差はまったく見られない。同一人物の手になるものと考えるのが、自然である。それが角田柳作であれば、民友社退社後の角田柳作の足跡を発掘することが可能となる。しかも、随所に、「啣々たる虫声」「胸中鬱勃」などの角田柳作の愛用語彙が発見できる。

内容的には、「迷へる西行」「蕪村の秋」「菅公の片影」の三編が力作であり、それぞれ西行論・蕪村論・道真論として出色の評伝である。これまでの角田柳作の評伝のスタイルを踏襲しているのが、『飛花落葉』を角田柳作の著作と認定する最大の根拠である。

また、社会的な問題にも筆は及んでおり、「蓄妾」を正面から批判したり、「貧民」への同情の念を吐露するなど、社会制度の不正への告発も見られる。『晴川春草・歴々々々』よりは、格段に深みのある著書である。角田本人にインタビュ―した永井道雄の証言によつて、若かりし角田柳作が社会的に差別されている貧民の救済を志した事実は、よく知られている。その時期は、東京専門学校を卒業した直後だと推定されているが、卒業した明治二十九年七月から民友社に入社する明治三十年一月までには、半年間しかない。あるいは、民友社を退社した後には、京都に移り住み、明治三十二年八月に教壇に立つまでの間のことを考えてもよいのではないだろうか。『飛花落葉』には、そのような角田柳作の社会改革に寄せ

る情熱が感じられる。彼は、何度か「自分は貧民の味方だ」という趣旨の発言をしている。

この著書で注目されるのは、「軟骨動物」で、人間が人間たりうるのは「志操」と「行為」の高さに依るのであって、それを無くした人間は軟骨動物と異ならないと主張している点である。その際に、榎本其角の作と伝えられる「赤とんぼ羽根を取たら唐辛子」という句を掲げているのが、まことに興味深い。この句は、チェンバレンが明治二十一年に上梓した英文の『日本大文典』に収録されたもので、出典は未詳ながら諸外国で大きな話題となった句である。

チェンバレンの著書のローマ字表記を平仮名に改めれば、「あかとんぼはねをとつたらとうがらし」「とうがらしはねをつけたらあかとんぼ」。前者が其角の句で、後者が芭蕉の訂正した句だとされる。むろん、芭蕉の全集にも、この句は見られない。しかし、ヨーロッパでは、多くの詩人や政治家が、このやりとりを用いて芭蕉の俳諧の真髓と日本文化の本質を論じている。チェンバレンがこの句を知った契機が何であったか、わたしはまだ突き止めていないが、芭蕉を深く愛した角田柳作ゆえに、そして英語に堪能だった角田柳作ゆえに、チェンバレンの原書を通読して、この句を印象深く記憶していたのではなかったらうか。

4・4 『血と涙』

明治三十三年八月二十五日、河合文港堂の発行。著者は「育英社」で、その代表者が「河合卯之助」。著者は、「松霞子」、「松霞」に「子」が加わっているが、「松霞」と同一人物である。

表紙は、荒野の中の髑髏を象った大胆なデザインである。ただし、角田柳作の著書である可能性の残る前記『禅と活動』の末尾（奥付の直前）にも、骸骨の挿絵がある。角田柳作は、一休などの禅僧に早くから親しんでいたと見られ（世に『一休骸骨』なる書物が伝わっている）、この『血と涙』の骸骨のデザインも、その一休への嗜好の反映とも考えられる。ただし、序文では、いささかおどろおどろしく、この小冊子の中には「鬼魔が血涙の痕跡」が残っているはずだと書いている。

内容は、短い社会評論エッセイの集成である。角田柳作の著作だとすれば、彼の社会改革への志の高さと、青年への期待を切々と吐露していることになる。以下、注目を挙げてゆこう。

かつて角田柳作は、幕末の『雲井龍雄』を論じているが、本書でも二箇所

井龍雄の名前が肯定的に出ている。

本書に「人爵か天爵か」という問題意識がしばしば出てくるが、これは角田柳作が『詩人西行』などで問題としていた視点であり、その時に用いた語彙である。足尾銅山の公害問題に言及したり、被差別問題の解決を祈ったり、女性の地位向上に言及したりしているのは、角田柳作の基本姿勢と一致する。特に、「才女の務」で屋代弘賢が娶ったばかりの妻に送った手紙を引用しているのは、角田柳作が民友社に勤務していたことと関係があるであろう。というのは、角田が勤務していた頃の『家庭雑誌』に、ほかならぬ屋代弘賢のこの手紙が掲載されているからである。

「神聖文学」で、現今の文学は肉慾と不潔に満ちており、詐欺・誹謗・姦淫・放蕩・偽善・虚飾ばかりだと嘆き、神聖な文学を復活させるべきだと論じている。これは、角田柳作が時代の墮落に抵抗して純潔と高潔を守り抜いた紫式部・清少納言・西行・兼好を高く評価し、時代と共に墮落した西鶴を痛罵した『井原西鶴』を書いたことと同じ価値観の表明である。

最後に、「人間の不具」は興味深い問題を含むので、全文を引用してみる。

縦令不具なればとて、草木や蘆竹の不具なるは、却りて値打あるものなれども人間の不具なるものに至りてはあはれにも又あはれならずや。

ここで、著者（松霞子＝松霞＝角田柳作）は、『徒然草』第百五十四段を念頭に思い浮かべているのである。

この人（注、日野資朝）東寺の門に兩宿りせられたりけるに、かたは者ども集まりゐたるが、手も足も揆ちゆがみ、うち返りて、いづくも不具に異様なるを見て、とりどりに類なき曲者なり、尤も愛するに足れりと思ひて、目守り給ひけるほどに、やがてその興尽きて、見にくく、いぶせく覚えければ、ただ素直に珍しからぬ物には如かずと思ひて、帰りにて、この間、植木を好みて、異様に曲折あるを求めて、目を喜ばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なく覚えければ、鉢に植ゑられける木ども、皆掘り捨てられにけり。

さも、ありぬべきことなり。

松霞子は、すなわち角田柳作は、早く『兼好法師』という著作もあり、若くから『徒然草』に親しんできた。当然、この第百五十四段の内容も知悉していただろう。そして、この第百五十四段には、納得できないところと納得できるところの両面を感じたのである。『血と涙』の「あはれにも又あはれならずや」という

文章には、社会改革を志し、社会的弱者へ熱い思いを抱いてきた角田柳作の心が脈打っている。

なお、この『血と涙』は、後に再刊された。奥付によれば、明治三十六年四月十日発行。著作者の「英育社」は、「育英社」の誤植であろうか。発行所は、大阪市東区心齋橋通の「小谷書店」。発売所は、東京の「金刺書店・岡崎屋書店」、京都の「河合書店・便利堂書店」、大阪の「小谷分店」の五箇所である。

『血と涙』の初刊と再刊を比較してみると、本文の組み方や挿絵の使い方は、まったく同じである。ただし、表紙のデザインが違っている。初刊では、『血と涙』の「と」が変体仮名の「と」(登)という字の草書体であったのに対して、再刊は通常の平仮名の「と」である。また、初刊では野辺に置かれた髑髏が印象的だったが、再刊ではこの絵は消滅した。

4・5 『青年文学・時文断片』

明治三十三年七月二十五日発行。著作者は、「松霞子」。発行者は、「武田福蔵」。発行書肆は、大阪市東区の「武田交盛館」。表紙には、漢字以外にも、ローマ字で「THE SHOKASHICHO KOSEIKAN HAKKO」とある。「松霞子著 交盛館発行」という意味だろう。

冒頭に、「後園の藤架に紫雲いと艶なる時、京都鴨川のほとりに、編者識」として、序文が載っている。「編者識」とあるように、目次を見れば、「歐蒲公」「青岑」「愚哉」「松霞」「松風」という五つの筆名で、二十六の散文・韻文が収録されている。これまでの著書に見えない新たな筆名もあるが、おそらく、すべて同一人物の筆になるものではなからうか。あるいは、角田柳作を中心とするグループなのだろうか。

いくつか注目すべき箇所を列挙する。

「盲詩人が失樂園」(「青岑」筆)では、最近の文壇では「源語を読まずして紫女を喋々」する不届き者が増えてきたと批判した後で、批評の際の心構えとして「マナーレー」の名前を出して、「崇拜的賛辞」のみでは「無瑕」ではありえないと述べる。角田柳作に『紫式部』という著書があること、そして「マナーレー」の指し示した「欠点もあげつらう」評伝が必要だという角田柳作の信念が、ここでも述べられていることになる。

「俳諧景情」(「青岑」筆)では、其角と芭蕉の「赤蜻蛉羽を取たら蕃椒」「蕃

椒羽を附たら赤蜻蛉」の句を引用している。『飛花落葉』と共通する素材である。

「おらが秋」(「青岑」筆)は、脚気を患ったことか語られ(この病名は『恋の本相』でも触れてあった)、転地療法のため「伊山」に赴いたとされる。「伊州」「韓山」「天神の鐘」「久米川」「山溪寺」「法主」「万福寺」などの固有名詞が出てくるが、この「伊山」がどこであるか、よくわからない(朝鮮半島のようにもある)。「この場所が著者の生まれたところであるが、家もなく友もないので、「似而非故郷」だと述べられている。もし、この叙述が真実であるならば、「青岑」は群馬生まれの角田柳作ではありえないことになる。

「パレットとペン」(「青岑」筆)は、「花は盛りに月は隈なきを見るものは」と、『徒然草』の名言を引用している。角田柳作と『徒然草』の関係の深さは、これまでで述べた。また、この「パレットとペン」の終わりの部分にも、兼好の人間性についての考察がある。

「小天地」(「松霞」)には、「舟霧」「無禅」という俳句作者の名前がある。「舟霧」については前述した。「無禅」についても、その筆名が角田柳作であると考えられるので、この「無禅」でも近代デジタルライブラリーを検索する必要性が生じた。

「楽天厭世及び洒脱」(「松霞筆」)には、著者が「一葉女史」の小説を愛読していると語られる。角田柳作は、実名で書いた『井原西鶴』でも『書齋・学校・社会』でも、樋口一葉について語っている。また、同じ文章で、近松門左衛門を高く評価しているのは、『井原西鶴』と同じ批評軸である。

「冥途の飛脚」(「松風」筆)で、この作品の詳細は「坪内博士」や「早稲田流の諸子」の説を参考にせよと述べている。角田柳作は、東京専門学校(現早稲田大学)で、坪内逍遙にも学んだし、早稲田流の諸子とは面識があった。

「山家の夕さり」(「松風」筆)では、詳しく西行論を展開している。『詩人西行』と基本的に同じ見方である。

「読書楽」(「松風」筆)では、「紅顔朝に端麗を誇るも、夕には空しく髑髏草場の霧に咽ぶ」という、角田柳作の愛用する慣用語が使われている。

なお、巻末には、「九月発行の予告」として、「支心庵無禅子編」の『時文の資料』が掲載されている。この書は未見であり、近代デジタルライブラリーにも収録されていないが、実際にもし刊行されていれば、角田柳作著者リストの候補に、更にもう一冊加わる可能性がある。

4・6 『花紅柳緑誌』

明治三十三年十一月十日発売。著作者は、「育英社」。その代表者は、「河合卯之助」。発行者も、「河合卯之助」。発行所は、「河合文港堂」。著者名は、表紙などで、「無腸公子」とされている。

序文では、自分が病気であることを記し、「瘦蛙負けるな一茶是に在り」の句を引用して、みずからへの励ましとしている。角田柳作の小林一茶への関心は高く、何度かその著書で言及されている。また、「明治卅三年八月、予の道後浴楼上にて、無腸公子誌」とあるのは、著者が角田柳作であったとすれば、持病の脚気の療養のために伊予の道後温泉を訪れた際に記したもの、という意味になるか。

そもそも、タイトルの「花紅柳緑」が典型的な角田柳作の愛用語であったし、「錦心繡腸」「千紫万紅」「人爵」という角田柳作の愛用語量も見られる。文体も美文調の文語文であり、他の角田の著作群と同一である。「恋の本相」という言葉も使われており、これは同時期に「浪の奴島」という筆名で書かれた「恋の本相」という単行本のタイトルと重なっている。

また、「美人の貞操」で、「黄鳥は、声の錦蛮（麗）の誤植か）たるがために死し、孔雀は、其姿の嬋娟の為に滅ぶ」と書かれているのは、角田柳作の処女作といふべき『紫式部』で、「孔雀は其の形の華麗なるがために捕はれ、黄鸝は其の声の美なるがために往々命を落とすことあり」とあるのと同じの発想であり、同一の文体である。

本書を、内容的に見てゆこう。

「中将業平論」「高僧の恋」は、実に詳細な業平や西行の評伝であり、角田柳作の人物評伝のスタイルと一致する。

「重盛の忠孝の観念」は、破魔神という筆名の人物が書いた『偉人修養史』の「平重盛の『沈勇』」と重なる内容である。

「歌塚」で、『徒然草』にある久米の仙人のエピソードを引用しているが、角田柳作と『徒然草』は切っても切れない関係にあった。

巻末の「白雲紅霓録」は、滝沢馬琴論であるが、角田柳作は他著でも馬琴を論じている。この論は、与田学海の説への批判を出発点としているが、角田の『兼好法師』も水谷不倒への批判から始まっていた。角田の文学観の根底は、芸術的な観点とは違い、道徳的な頹廢墮落を嫌悪し、そうでない場合を称賛するという

ものである。その基本姿勢は、この馬琴論でも貫かれ、その立場から作中人物が論じられ、主題が論じられ、作者が論じられている。

4・7 『せり籠』

明治三十四年六月十日の発売。奥付の著作者は、「残菊」。発行者は、「文港堂・河合卯之助」。これまで角田柳作かと推測される人物が河合文港堂から出していた本の著作者は、奥付では「育英社」と書かれていたが、本書は「残菊」とされている。

書名は、正式には『鴨涯文学・せり籠』である。

本書は、かなり本格的な美術論を含む芸術論である。エッセイというよりは論文に近く、著者が角田柳作だとすれば、彼の意気込みを強く感じさせる。それが、「残菊」という一回切りの筆名となったのかも知れない。

例によって角田柳作の愛用語彙を搜すと、「虫声唧々」などが見つかる。これ以外にも、文語文として、角田調といつか角田節せつが鳴り響いている。

「文学平等論」という文章で、著者の「残菊」は、古今東西のあらゆる文学には普遍性がある、と主張する。だからこそ、外国文学も、古典も、現代日本人が感動し共感できるのだ、と。もしも「残菊」角田柳作であるならば、ここに角田柳作の評論の根底であること、そして彼の研究の初心があることが理解できる。彼は、後になぜアメリカに渡ったか。そして、何のために外国人に日本の古典文化を教えたのか。この「文学平等論」にこそ、評論家・研究者・教育者としての角田柳作の初心があると考えると間違いはなからう。

「日本の『ヘロー、ウント、レアンデル』」という文章で、著者がかつて数箇月「山陰の一漁村」に遊んだと記されている。必ずしも、山陰が郷里だとは書かれていない。あるいは角田が脚気治療のために山陰へ温泉治療に赴いたことが、因幡を「故郷」と述べた『青年文学・時文断片』の誇張表現となつたのかもしれない。

巻末には、アストンの『日本文学史』の中から『源氏物語』に関する箇所を翻訳して示している。そして、ラフカチオ・ヘルン（小泉八雲）の「京都雜観」を翻訳して載せている。「残菊」角田柳作だとするならば、英語に堪能で、なおかつ『源氏物語』に深い関心を持つ角田柳作だからこそ、こういう翻訳が可能だったということになる。アストンはイギリス人でありながら、優れた日本文学の通史を書いた。チェンバレンと並ぶ、外国人の日本文学研究の草分けである。そ

れに感動する角田柳作の姿勢こそ、後に彼をしてコロンビア大学に於ける壮大な日本学構築者へと変貌せしめたのかも知れない。

ハーンについては、角田がハワイ滞任時代に実名で書いた『書齋・学校・社会』の中で何度も言及していることも付記しておく。

4・8 『思想と人物』

表紙に著者名は印刷されていないが、本文の巻頭に、「支心庵主無禅、春秋庵主青岑編」とある。二人の共著の体裁を取っているが、例によって文体の区別はできない。すなわち、これまで見てきたように、角田柳作の筆名である可能性がある。

奥付は、前に紹介した『血と涙』の再刊本と全く同じである。発行日も、『血と涙』と同じで、明治三十六年四月十日。著者は「英育社」とあるが、「育英社」の誤植であろうか。あるいは、『血と涙』再刊本も「英育社」であったことを考え合わせれば、誤植ではなく意図的に「育英社」と違えたのかもしれない。

発行所は、大阪市東区心斎橋通の「小谷書店」。発売所は、東京の「金刺書店・岡崎屋書店」、京都の「河合書店・便利堂書店」、大阪の「小谷分店」の五箇所である。

第一編が「政治家及武人」二十八人、第二編が「漢学者及詩人」十七人、第三編が「和学者及歌人」七人、第四編が「戯作者及俳人」十四人、第五編が「技芸家及優人」二十六人、第六編が「雑」四十四人、合計で百三十六人の小伝である。一人一人の簡略な経歴が記された後で、その人物の残した和歌や漢詩が紹介されている。その際には、今様とか狂歌とか端唄などの軽い作品が取り上げられることが多い。

5 空白を埋める試み

前稿では、角田柳作の活発な著述活動のうち、明治二十九年十一月五日から明治三十年七月二十三日までの七冊を突き止めた。

本稿では、国会図書館の近代デジタルライブラリーの十二万七千冊中から、既に十数冊を角田柳作の著作である可能性が否定できないものとして認定した。それらの書物の発行期間は、明治三十三年二月八日から明治四十一年七月九日まで

に及んでいた。

角田柳作が仙台一中を離れてハワイに渡ったのは明治四十二年五月であるから、彼の日本国内での著述活動がおぼろげながら見えてきたと考えてよい。けれども、わたしには大きな疑問が残っていた。というのは、角田柳作が民友社を離れてから、真言宗京都高等学校に赴任するまでの期間の著作がまだ発見されていないからである。すなわち、明治三十年七月二十四日から明治三十三年二月七日までの二年半の空白が気になったのである。これほど旺盛な執筆活動を持続してきた角田柳作に、足かけ三年間の著作の空白があることが信じられなかったのである。近代デジタルライブラリーの十二万七千冊の中には、この期間に角田柳作が書き表した著作物がまだ埋もれているのではないか。そう考えて、これまでに明らかになった十九冊の発行元などのキーワードを思いつく限り入力して、検索を試みた。

その結果、「池元半之助」という人物が浮上してきた。その契機は、小谷書店発行の『血と涙』（再刊本）と『思想と人物』の「発売元」と明記されていた「岡崎屋書店」であった。「岡崎屋」をキーワードとして検索した結果、六十三冊の書物がリスト・アップできた。それらを通読してゆくと、それほど期待せず読んだ「池元半之助」という著者の『側面観』が、角田柳作の文体と近似していることに驚かされた。

それからは、「池元半之助」あるいは「池元」で検索した結果、次の九冊が浮上してきた。

- ・池元半之助『溪韻松声』（文禄堂、明治三十二年七月）
- ・池元半之助『魔言録』（小美文舎、明治三十二年九月）
- ・池元半之助『嗚呼古英雄』（文禄堂、明治三十二年九月）
- ・池元半之助『側面観』（岡崎屋、明治三十二年十月）
- ・池元半之助『嗚呼古英雄 続』（文禄堂、明治三十三年二月）
- ・池元叻鹿庵『英雄僧日蓮』（新声社、明治三十六年四月）
- ・池元半之助『マホメットの戦争主義』（春山房、印刷は民友社、明治三十六年七月）

- ・池元叻鹿庵『英雄僧日蓮』（文学同志会大阪支部、明治三十八年三月）
- ・池元半之助『嗚呼古英雄・続嗚呼古英雄』（前川文栄閣・服部書店、明治四十三年九月）

そして、『嗚呼古英雄』と類似する書名で、同じ出版社から発行された次の書物も、池元半之助の著述であることが判明した。

・山形二星『嗚呼古遊君』（文禄堂 明治三十四年三月）

近代デジタルライブラリーには含まれないが、池元にはこの他にも何冊かの俳諧書があることもわかった。

・『新編俳句雄篇』（東京尚栄堂 明治三十五年一月。なお、岡崎屋から出版された版もある模様）

もしも「池元半之助」角田柳作であるとすれば、これらの著作によって、角田柳作の年譜の空白がほぼ完璧に埋まることになる。

ただし、「池元半之助」「池元叻鹿庵」については、『堺利彦自伝』に名前が出ている。それによれば、福岡出身であること、福岡日日新聞の記者を務め、後に東京で区会議員になったことが記されており、どう考えても角田柳作とは別人であると判断せざるを得なかった。筆名の付け方も、これまで見てきた「緑亭主人」「中龍児」「浪の奴島」「壺天禅洞」などとは違っている。

よって、この期間の角田柳作の年譜の空白は、まだ埋めることができない。今後の課題である。

おわりに

前稿に引き続き、筆名で書かれた角田柳作の著作を発掘する作業を行ってきた結果として、少なくとも数冊、多ければ約十冊の著書が角田柳作の著作ではないかと強く推定された。

少なくとも、『恋の本相』と『徒然草と兼好』の二冊は、蓋然性がきわめて高い。

そして、「台北で執筆したこと」とあることや、「因幡が郷里であること」「伊山の近くが郷里だ」と書かれていることをクリアできれば、さらに多数の角

田柳作の著作が判明することになる。特に、「育英社」から集中的に出版された著作群には、角田柳作の愛用語彙が多く使われていて、これらが角田柳作の著作でないとするのは困難だと思われる。

チェンバレンやアストンやハーンという、外国人による日本文化研究草創期の大家たちの著作に興味を持ち、古今東西の文学・芸術の普遍性を主張し、文化研究は社会改革に寄与するものでなければならぬという志を持った人物。それらが、「角田柳作の筆名」と想定される著作群に共通する著者の輪郭である。そして、それがコロンビア大学で教壇に立った角田柳作の「初心」あるいは「素志」であったことを、強く想像させるのである。

今後、さらに研究を続け、角田柳作の日本滞在時の業績を発掘してゆきたいと考えている。

In quest of Japanese cultural studies:
TSUNODA Ryusaku and his newly discovered publications before his
American period

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

TSUNODA Ryusaku (1877~1964), for many years since 1928 the Director of Center for Japanese Studies, Columbia University, is well known as a teacher of many distinguished Japanologists such as Donald Keen. His work prior to the visit to America, however, had been less known except *Ihara Saikaku* and two translations until my essay, 'Discovery of six books by Tsunoda Ryusaku', *Bulletin of the University of Electro-Communications*, vol. 16, no. 2, January 2004, identified his six other books besides *Ihara Saikaku* under several pseudonyms.

This essay will introduce and discuss another ten more books, written presumably by Tsunoda also under pseudonyms. The analysis of these writings will reveal that his understanding of Japanese culture quickly deepened by incorporating the results of the sociological and religious studies of Japan and that they had become the foundation of his Japanese cultural studies in America.

キーワード : 角田柳作、コロンビア大学、アメリカの日本学、浪の奴島、壺天禅洞、破魔禅、育英社、舟霧、松霞、松霞子、無腸公子、無禅、青岑、池元半之助